E.M.Forster と Brutality

—— A Room with a View に於ける Mr Emerson の場合 ——

大野佳代子

はじめに

Forster は1905年発表の長編処女作 Where Angels Fear to Tread により非常に有望な新人との世間の注目を集め、1910年発表の第4作 Howards End によって圧倒的な好評を得るとともに同時代の第一流の英国小説家としての地位を確立した[1]と言われる。この間に発表された2作品と前作 Where Angels Fear to Tread は、執筆時期がほぼ同じであったこともあってか、相互の関連性が非常に強いようである。殊に A Room with a View と Where Angels Fear to Tread との間には、かなり多くの類似性が認められる。小説の背景に大きくイタリアが横たわっていること、イギリス人の若い女性の恋愛を軸にストーリーが展開されていること、全体の調子が諷刺喜劇になっていることなどである。つまり、どちらも若い英国人女性がイタリアに触発されて自己認識に目覚め、旧弊な社会から離脱していく過程を描いたものだということである。Forster は小説の中に常に相対立する概念を呈示する作家であるが、ここで対照物とされているのは、英国の上層中産階級に多くみられる因襲にとらわれ体裁とか形式にこだわる偽善的生活を送る人間と、イタリア社会に多くみられるような自由と自然を謳歌し自分の感情を偽らずに生きていこうとする人間である。かくの如き多くの共通性をもったこの2つの作品。Where Angels Fear to Tread でかなりの好評を得、将来を大いに有望視された Forster にとって、A Room with a View を著すことにはどのような必然性があったのであろうか。本論では A Room with a View を中心に前2作との関連をみることにより、青年 Forster の内的世界を探ってみたいと思う。

I.

A Room with a View は発表年度の順では第3作であったが、実際に着想を得たのは最も早かったようである。ケンブリッジ大を卒業した1901年の秋に彼はイタリア旅行に出かけているが、この旅行中のかなり早い時期に既に Lucy を主人公とした物語に関する次のようなメモが残されているからだ。'Who? Lucy Beringer. Miss Bartlett,her cousin. H.O.M. Miss Lavish. Miss Dorothy & Miss Margaret Alan. Where? Florence, Pension Bertolini. Doing What?'[2] このイタリア旅行はさまざまな感慨を彼に与えたことであろうが、小説を書こうと思い立ちメモをとり始めた時に登場人物として第一に構想したのが、女性ばかりであったという点が非常に興味深く思われる。一体に Forster の小説では男性よりも女性の方が行動性に富み、決断力のある人物として描かれているようである。これは Francis King も指摘している[3]ように Forster の心の中に常に、母親に象徴されるこぢんまりとして整然とした保護的で居心地の良い女の世界という、彼をとりまく現実に対する認識があったためであろうと思われる。粗野で荒々しく無教養で危険をはらんだ男の世界を、しばしば彼が好んで描くのもまたこのためであったろう。彼が幼少より身を置いてきた“女の世界”とは……。

Forster には兄が一人いたが出生時に死亡。また父親は結核で彼が1才10ヶ月の時に死亡しており、以来彼は母親（通称 Lily）が1945年に90才で死亡するまで母一人子一人という親子関係のもとに生きていったのである。母方の Whichelo 家は下層中産階級に属し祖母 Louisa は夫が10人の子供を残し遺産もなく早死にした後、

下宿屋を営み一家の生計を支えたほどしっかりした女性であったが、長女 Lily はこの母親に輪をかけたような気丈な聡明な女性で、Louisa は Lily を最も頼みにしていたと言われる。一方父方の Thornton 家はかなり裕福な上流階級の家庭で、Forster 母子はこの親戚から随分恩恵を受けたようであるが、なかでも一族の大長老 Marianne Thornton（通称 Monie）は父親を早く亡くした不憫さも手伝って、親戚の他の子供たちが大いに羨しがり妬みに思うほどの愛情を彼に注いだようである。Lily は彼女の要請により彼の日常を伝える手紙を何通も書き送らねばならなかった。また伯母 Laura も一生独身を通したせいもあってか弟の遺児である彼を溺愛。だが彼女には Thornton 家の家柄を自慢する傾向があり、下層中産階級出身ではあるがボヘミアン的雰囲気の中で育った聡明な Lily とはうまくいかないことも多かったようである。Forster の小説には一貫して Cambridge 的なものと Sawston 的なものという対照が描かれるが、これは要するに 'Whichelos' と 'Thorntons' の対比であるという解釈を Francis King はしている[4]が、Forster の幼少時の環境をみるとき、この解釈は妥当性をもつものと言える。Marianne は Forster 母子を死ぬまで援助し続け、1887年には多額の遺産を彼らに残した。Francis King はこれについて、"Marianne はわずかな遺産を Forster に残したことにより、かえって彼が偉大な小説家になる妨げとなった[5]"という皮肉な見方をしている。果たして本当に妨げとなったのかどうかは別として、彼がこのような周囲をとりまく女性たちから多大な影響を受けずにはいなかったであろうことだけは確かである。Lily の Forster に対する病的なほどの過保護ぶりや、幼い彼が Marianne のマスコット的存在であった様子が次の文からうかがえる。

> She was morbidly anxious about Morgan's health and coddled him obsessively. All through his childhood he was never allowed out if there were the slightest threat of rain, and in the mildest wind he had to be swathed in warm coats and mufflers. He imbibed the anxiety himself, and right up to middle age he thought of himself as extremely frail and likely at any time to develop consumption.[6]
>
> He was a pretty child, at the age of three or four, with large expressive eyes. At Monie's insistence, he wore his hair in curls to his shoulders and dressed in Little Lord Fauntleroy suits with lace collars; he was, he said, one of the very last children to be tormented in this manner.[7]

女ばかりの盲目的な愛情にくるまれて育った彼が、長ずるにつれ徐々に"男の世界"に魅力を感じ始めたであろうことは容易に察しがつく。ケンブリッジ大在学中の最後の年に彼は、当時男ばかりのエリート集団と目されていた Apostles という会に入会した。これについて"Apostles もそれよりもう少し大きな社会 Cambridge も共に男社会である。彼がこれまで育った女ばかりの環境と全く逆であることが大いに彼を満足させた"と Francis King は述べている[8]が、事実彼は後に女性にも入会を認めてはどうかという提案がなされた時、賛成の立場をとらなかったほどである[9]。20才を過ぎた頃には既に彼は自分は同性にしか愛情を感じ得ないよう運命づけられているのだと悟っていたようであり[10]、かつ自分が望むような理想の友人は決してみつからないのではないかという不安と孤独の日々の中で、彼の文学活動は一層強まっていったようである。この不安と孤独の日々の所産が初期の3作品である。相次いで発表されたこれらの作品には、先述の Whichelo 家、Thornton 家の対比をはじめ、Lily や Marianne 等 Forster をとりまく支配的な女性たちを基に形成された、さまざまな世界が一貫して扱われている。なかでも Forster のこの内心の焦燥を最も克明に描き出しているのは、The Longest Journey であろう。これは前に発表された Where Angels Fear to Tread に比べると世評は概してひどく悪かったが、Forster 自身にとっては会心の作であり、最も気に入っている作品の一つであったようである。"自分が言いたいと思っていたこと

に最も近いことを伝えている本である”とForsterは述べている[11]が、彼の友人 Strachey がその友人に宛てて次のような手紙を書いているほど、それは実生活に近いものであったらしい。

He's just written his second novel, and there's a rather amusing account of Cambridge in it, and Cambridge people. One of the very minor characters is asked to breakfast by one of his friends, and replies by putting his hand on his stomach, to show that he's breakfasted already. MacCarthy thinks that this is me. Do you? ....[12]

このあまりにも自叙伝的要素の濃厚な作品の中に我々は、現実の世界で苦悩する Forster の姿と、彼が求めてやまない理想の世界とをはっきりと知ることができる。彼の夢である“男の世界”を象徴するのは Stephen Wonham である。彼は逞しい健康にあふれた若い男性で、粗野で無教養だがまぶしいほどの肉体美を備えた男として描かれている。一方 Forster 自身を表わしていると思われる Rickie は、知性と教養は人並みすぐれているが、肉体的にはひどく見劣りのする——びっこで病弱——男として描かれている。Where Angels Fear to Tread でもこれと全く同じタイプの男性が2人登場する。る。Gino と Philip である。Gino は不作法で無教養な人間だが Stephen 同様すばらしく健康な若さあふれる男として描かれており、Lilia と Miss Abbott をその男らしい肉体で魅了する。一方の Philip はきわめて高い知性と教養とプライドをもちながらも、肉体的には何ら魅力のない貧弱な男として描かれている。この2つの作品で Gino・Stephen そして Philip・Rickie という全く同じキャラクターを繰り返し登場させているということは、それだけ Forster の“強く逞しい男性”への憧景が強いものであったことを、また同時に自身の肉体及び人を惹きつける魅力というものに対する自信のなさを、物語るものであると言えるのではないか。しかし Gino と Stephen はその人物描写に於て、あまりにも観念的・類型的でありすぎるように思われ、はなはだ説得性に乏しい。これは彼らが理想の男性として Forster の空想の中で産出されたためであろう。あまりにも平板な人格のために、作者 Forster にとっては魅力的かもしれぬが、読者にとっては何ら惹きつけるものが感じられないのである。Katherine Mansfield が Howards End に於ける Helen のスキャンダルに対する Forster の扱い方について、次のような非難の声を浴びせている。

I can never be perfectly certain whether Helen was got with child by Leonard Bast or by his fatal forgotten umbrella. All things considered, I think it must have been the umbrella.[13]

Forster は自分の理想とする男性を、自分の視点からプラトニックに描くことはできても、男女間の性的関係を扱う能力には欠けるところがあったと言うことができるのではないか。

Gino・Stephen に比べると Philip と Rickie は、Forster 自身という謂わば“現実の世界”の所産であるために、そのキャラクターはより多面性をもったものとして描かれている。しかしとりわけ強調されているのは彼らの“非積極性”である。Forster にとって現実の世界とは、母親を代表とする“女に支配された世界”であった。彼は自分の分身である Philip や Rickie の“弱性”を強調することによりこの“女の世界”を一層印象的なものにしようとしたのであろう。Where Angels Fear to Tread では因襲と偽善にみちみちた閉鎖的な社会を代表するのは Herriton 家の老未亡人 Mrs.Herriton であり、イタリア旅行を契機に真の自我意識に目覚め自由を求めて Sawston から逃避、真の自己の確立を目指して苦闘するのは Herriton 家の長男の未亡人 Lilia である。Miss Abbott は Lilia のイタリア旅行に付き添いとして同行し、彼女の恋愛とその結果に関与したことにより、やはり同じように Sawston の旧弊性・虚偽性に気付き、精神的脱皮をとげる。しかし Lilia が謂わば体を張って偽善的なイギリス社会から離脱し、その結果自由と真実を求める新しい生活の中でまさに身も心もボロボロになっていくのに比して、Miss Abbott の方はきわめて理性的に行動して

いく。彼女たちに共通して言えることは、いずれも自身の強い意志のもとに行動しているということである。或る種の強靱さを感じさせるこれら3人の女性に対して男性はと言えば……。この小説に登場する主な男性は2人。前に述べた Herriton 家の次男 Philip と、Lilia がイタリアで再婚する相手 Gino である。Philip はいわゆる傍観的な教養派である。彼は Sawston という社会の本質を見抜いている。そこに住む人々の俗物性を軽蔑している。以前に友人とイタリア旅行をしイタリア社会の発散する自由で明るく活気のある雰囲気に魅了されて以来、彼のこうした反感は一層強まった。勿論 Sawston 社会の代表である Mrs. Herriton に対してもきわめて批判的な考えをもっている。しかし彼のその考えはあくまでも彼の内部のこと、或は時にせいぜい口に出して言ってみるだけであって、決して行動になって現われることはないのである。行動的には Philip は全く母親 Mrs. Herriton の操り人形である。物語の後半、Miss Abbott に触発されて徐々に彼の内部の“反 Sawston”なるものはふくれ上っていき、あふれほとばしり出るかと思われたが、それも結局は一時的なものに終ってしまうのである。彼はまるで観念だけの形骸として描かれているようだ。Gino も同様である。彼に関して特に印象的に描かれているのは、その容姿に関するものであろう。彼はその魅惑的な容姿で Lilia を一目惚れさせ、彼女を説得し連れ戻そうとやってきた Philip をも魅了した。そしてまた終始冷静で思慮深く行動していると思われた Miss Abbott までもが彼に魅かれていく。しかし Gino 自身は全く行動しない。彼は何の行為も意識もなく、ただあるがままの彼として存在しているのであり、謂わば彼の果たすべき役割というのは、ただ存在するということだけなのだ。彼は単に Lilia の Sawston からの脱出行為、Miss Abbott の緩慢だが着実な前進をひき出し、一方で Mrs.Herriton の Sawston 性をきわ立たせるための道具にすぎない。つまりこの小説では、男性は女性のロボット或は行動を促す刺激剤として登場しているのである。これに対し女性は自らの意志で行動する。作品の世界を動かしていくのは女性なのである。

II.

以上、前2作に描かれている“女の世界”と“男の世界”をみてきたが、前にも述べたように、この2つの世界は Forster にとっては即ち“現実”と“願望”であったと考えられる。つまり“現実—Forster—願望”という構図がどちらの作品にも共通してみられるのである。Where Angels Fear to Tread では Mrs.Herriton—Philip—Gino がその象徴となっており、The Longest Journey では Agnes—Rickie—Stephen がそうである。それでは A Room with a View ではどうであろうか。この作品に於ては少なくとも、前2作に共通して描かれたような構図は認められないようである。Mrs.Herriton や Agnes に象徴された“女の世界”の支配性・行動性・意図性はみられない。代わってそれらを備えているのは Mr.Emerson である。彼は驚くほど支配的・意図的な人物として描かれている。A Room with a View では、作品の世界を大きく動かしていくのは女ではなくて男なのだ。では Mr.Emerson の役割を眺めてみよう。

1901年秋から翌年にかけての1年余りのイタリア旅行中に見聞した出来事・出合った人物等が核となって構成されたのが A Room with a View である。この時同行した彼の母親 Lily が部屋の窓からアルノ川を見晴らせることを強く望んだため、別のペンションに移ったということが10月20日付の彼の日記に記されている[14]が、この母の主張及びペンションの様子は A Room with a View の冒頭シーンを思い起こさせる。また彼らがホテルで滞在中知り合った女流作家は Miss Lavish のモデルとなったらしいことが、12月15日付の Lily の手紙[15]から推察される。登場人物はメモにあった Lucy, Bartlett, Lavish, Alan 姉妹を含めて全部で13人。このうち女性は6人である。冒頭のシーンはフローレンスの或るペンションの食堂で、イタリア旅行にやってきた若いイギリス人女性 Lucy Honeychurch と彼女の後見役として同行したハイ・ミスの従姉 Charlotte との会話で始まる。彼女たちは窓の

ある部屋を希望しておいたのに、実際宿に着いてみると部屋には窓がなかった。Charlotte の愚痴を耳にした隣席の初老の男が突然声をかけてくる。自分たちの部屋には窓がついているが、なくてもかまわないので、部屋を取り換えてあげようという申し出であった。こうして“見晴らしのある部屋”をきっかけに Lucy は Mr. Emerson（初老の男の名）と知り合いになる。この最初のほんの数回のやりとりのうちに、Forster は Mr.Emerson の像を鮮明に読者に印象づける。Charlotte は体面を重んじる形式主義者。見知らぬ男から突然 'I have a view, I have a view.' と声をかけられた時の彼女の反応は次のようであった。

> Miss Bartlett was startled. Generally at a pension people looked them over for a day or two before speaking, and often did not find out that they would 'do' till they had gone. She knew that the intruder was ill-bred, even before she glanced at him.(R,p.8)

この文から Mr.Emerson が Chalrotte とは、全く異なったものさしを持った人間であることが推察できる。彼女は彼をその外観からのみ判断。彼のような人間とはかかわりをもちたくないと本能的に希い、その申し出を拒絶する。彼女としては、初対面の素性の知れぬ男に恩を売られることを極力警戒した故であり、何故断わるのかという彼の問いに 'Because it is quite out of the question.' (R, p.9) と答えるのだが、それが彼には全く通用しない。彼は息子の George にも彼女を説得するよう言い、George はこれに対して次のような言葉を口にする。 'It's so obvious they should have the rooms,.. There's nothing else to say.' (R, p.9) ここで Forster は 'Miss Bartlett, though skilled in the delicacies of conversation, was powerless in the presence of brutality.' (R, p.9) と言っている。つまり Emerson 父子を brutality を具現するものとして描こうとしているのである。

彼の小説にはしばしば brutality を具現する人物が登場している。Where Angels Fear to Tread の Gino, The Longest Journey の Stephen がそれである。いずれもイギリスの中産階級の偽善・因襲・形式主義と真向うから対立する存在として描かれており、Philip や Miss Abbott そして Rickie たちを軌道修正に導く役割を果たしている。この A Room with a View でも Emerson 父子の果たす役割は同様なのであるが、Gino や Stephen と決定的に異なる点がある。それは Mr. Emerson の行動は非常に意図的だということである。Gino や Stephen の場合は、彼ら自身は何ら Philip や Miss Abbott 或は Rickie の目を開かせよう、己れの虚偽性に気付かせようという意図はもっていない。しかし Mr.Emerson はそうではない。彼は Lucy の脱皮の手助けになろうという明確な意志のもとに行動しているのだ。或る日 Lucy はベデカー一冊を頼りに Miss Lavish と町へ観光に出かけるが、道に迷いその上 Miss Lavish ともはぐれてしまう。途方にくれている彼女の前に偶然 Emerson 父子が現われ案内役を買ってでるが、このMr. Emerson の guide という行為はその意味で象徴的なものと言えよう。Emerson 父子と同じく brutality を具現するものとして登場していても、Gino の場合はその野性が自分にしか向けられていない。Gino の brutality は彼の生命を刺激し、彼自身の生活を生き生きとした自由なものにしているが、Lilia の人間性をかえりみることはない。Gino 一人に限定されたものであった。Lilia は Gino に出合ったことにより、一度は自由と真実の生活を手に入れたかにみえたが、結局はその Gino の野性に翻弄され、死に至った。一方 A Room with a View に於ては Lucy は Lilia と同様、brutality の象象である Mr.Emerson の息子 George との恋を通じてイギリス社会と離反していくのであるが、彼女は Lilia のように失敗することはないであろうことが、予測される。それは Mr.Emerson がいるからだ。彼のもっている brutality は Gino のそれとは異なり、普遍的なものであった。Mr. Emerson は常に広い視野から物事を眺めようとする。彼は常識とか社会通念とかの中味を知った上で、それに盲目的に追随することを批判するのである。謂わば既成概念に対する彼の批判、

自らのやり方の主張には、年令と経験というバック・アップがあるのだ。このことは Mr.Emerson に、或る種のゆとりを感じさせる効果を生じている。彼の言動には何もかもを見通しているかのような哲人めいたところはあっても、性急さはない。相手に対する期待・要求がむき出しにされることは決してない。Mr.Emerson に関する形容には child という言葉が目立って使われている。'There was something childish in those eyes, though it was not the childishness of senility.' (R, p.8) 'And he thumped with his fists like a naughty child,…' (R, p.9) Forster が Mr. Emerson に具現しようとした brutality とは、childishness にも通じるものなのであろう。つまり無邪気な、子供っぽい純真さをもった人間、直情径行型の、単純明快な人間——それが Emerson 像であろうと思われる。彼は常に物事の真実の姿を見ようとする。因襲や体面や宗教にとらわれることなく、自分の見方・自分の心を大切にしようとする。Lucy が属しているイギリスの社会通念では、若い女性が一人で殊にイタリアのような町を出歩くことは、全く常識外れの行為ということになっている。以下は Miss Lavish とはぐれ一人っきりになってしまった Lucy と Mr.Emerson の会話である。いわゆる社会通念というものに対する彼の見方がよくあらわれている。

"What are you doing here? Are you doing the church? Are you through with the church?" "No," cried Lucy, remembering her grievance. "I came here with Miss Lavish, who was to explain everything; and just by the door — it is too bad! — she simply ran away, and after waiting quite a time, I had to come in by myself." "Why shouldn't you?" said Mr Emerson. "Yes, why shouldn't you come by yourself?" said the son, addressing the young lady for the first time. "But Miss Lavish has even taken away Baedeker." "Baedeker?" said Mr Emerson. "I'm glad it's that that you minded. It's worth minding, the loss of a Baedeker. That's worth minding." (R, pp.26-27)

Mr.Emerson の強味は彼が物事に対して独自の認識をもっている点にある。彼が自分をとりまく一切のものに対して確固たる哲学をもっている人間であることを示す描写は随所にみられるが、それは彼の brutality を一層きわ立たせ、彼を読者にとってより魅力的な人物にしている。次の文は Lucy 宅に招かれた George が、彼女にこの辺りの風景をどう思うかと尋ねられた時に彼女と Cecil 相手に語った言葉であるが、Mr. Emerson の"生"の基盤となっている哲学の一端、及びそのような父親を George がいかに崇拝し誇りに思っているかを示すものである。

"How do you like this view of ours, Mr Emerson?" "I never notice much difference in views." "What do you mean?" "Because they are all alike. Because all that matters in them is distance and air." … "My father" — he looked up at her (and he was a little flushed) — "says that there is only one perfect view — the view of the sky straight over our heads, and that all these views on earth are but bungled copies of it." … "He told us another day that views are really crowds — crowds of trees and houses and hills — and are bound to resemble each other, like human crowds — and that the power they have over us is something supernatural, …" (R, pp.168-69)

George がこう語るのを聞いて Lucy は '"What a splendid idea!" she murmured. "I shall enjoy hearing your father talk again."' (R, p.169) と言うのであるが、確かに George を通して語られる Mr.Emerson は魅力的な人物である。Lucy が Mr.Emerson の人柄を知るにつれぐいぐいと彼に惹きつけられていくように、読者の脳裡でも Emerson 像はより鮮やかなものとなっていく。前2作に於ける brutality の象徴であった Gino や Stephen は、そのキャラクターがあまりにも平板で説得性がないとは先に述べたが、Mr.Emerson の場合は充分に読者を惹きつける魅力をもった人物として描かれて

いると言うことができる。

III.

Mr.Emerson は brutality の象徴という役割の他に、もうひとつの点できわめて重要な人物となっている。それはこの作品の表題ともなっている view との関わりに於てである。前に Where Angels Fear to Tread と A Room with a View との間には多くの共通性が認められると述べたが、回帰性もその一つである。Where Angels Fear to Tread はイタリア旅行に旅立つ Lilia と Miss Abbott を見送る Charing Cross 駅のシーンで始まり、今後の生き方をそれぞれ胸に抱いた Philip と Miss Abbott を乗せた列車が長いトンネルに入っていく所で終っている。つまり鉄道のシーンで始まり、鉄道のシーンで終っているのである。A Room with a View でその起点と終点となっているのは view である。Lucy と Charlotte が窓のある部屋でなかったことに対する愚痴を言うシーンで始まり、Lucy と George が窓から外の風景を眺めているシーンで終っている。

Forster はこの作品のあちこちにこの view という語をちりばめているが、それに対する登場人物たちの反応はさまざまである。たとえば、Lucy と Charlotte のそれは、この2人の考え方の本質的な相違を暗示するものである。Mr. Beebe のとりなしで結局 Charlotte は Mr. Emerson の申し出を受け入れ、それぞれに窓のついた2部屋続きの部屋に移ったのであるが、大きい方の部屋は Lucy に使わせるわけにはいかないと言う。若い男性 (George) が使っていた部屋だからというのがその理由であった。大人の因襲に支配された社会の不可解なものの考え方というものを、Charlotte を通して知らされた Lucy の反応を我々は、この後 Lucy がとった次のような行動によって知ることができる。

> It gave Lucy the sensation of a fog, and when she reached her own room she opened the window and breathed the clean night air, thinking of the kind old man who had enabled her to see the lights dancing in the Arno and the cypresses of San Miniato, ・・・ (R, p.18)

"窓" は Lucy にとっては因襲的な窒息しそうな社会から逃れるための出口であった。彼女は窓をあけ、外の清新な空気を存分に吸い込みながら view を楽しむ。そこには、自由な限りない世界がひろがっている。これに比して Charlotte の方は次のような行動をとる。

> Miss Bartlett, in her room, fastened the window-shutters and locked the door, and then made a tour of the apartment to see where the cupboards led, and whether there were any oubliettes or secret entrances. (同上)

彼女は Windy Corner の Mrs Honeychurch 宅を訪れた時にも、窓のない部屋をあてがってくれるよう頼んでいる(R, p.151)。J.S.Martin も指摘している[16]ように、Forster は view を非常に注意深く取り扱っているのであり、主な登場人物たちは view に対するその反応の仕方によって、救済される者とそうでない者とに選り分けられているようである。

この物語で主人公 Lucy の精神的な成長を助け謂わばガイド的な役割を果たす Mr.Emerson は 'I have a view, I have a view' という言葉と共に登場する(R, p.8)。彼は view に関して Lucy と Charlotte 相手に次のようなことを言う。'Women like looking at a view; men don't.' (R, p.9) この彼の言葉は物語全体を通してみた時、非常に大きな意味をもつものである。view はこの作品では外界——自由な世界——の象徴となっているのだ。つまり "女の人は窓のある部屋を欲しがるものだ、男はそれほど必要としない" という彼のこの言葉には、"男には既に自由が認められているが女には認められていない。それだから女にこそ窓のある部屋は必要なのだ" という意味がこめられているのである。女性に対する社会的制約は、大きく強いものであった。女性が就ける仕事には限りがあった。governess (住み込みの女家庭教師) が当時の女性にとっての唯一まともな職業であったことは、Forster の母親自身の体験[17]からも明らかなことだ。このさまざまな社会通念——女

性に対する制約——を Lucy に教え込もうとするのが Charlotte である。旅行中保護者気取りの Charlotte は、何かにつけて Lucy に中産階級の良家の子女としての意識・振る舞い方を仕込もうとする。まさにボーヴォワールの指摘したように、[18] 人は女に生まれるのではなく、女に作られるのである。Lucy は Charlotte のような出来上った人格をもってはいない。その形成期にある人間である。過度期にある彼女の内部を露わす描写はいくつかあるが、次の文は彼女が既成のものに対して何となく不満な、きわめて不安定な心理状態にあることを示すものである。

> "Yes," said Lucy despondently. There was a haze of disapproval in the air, but whether the disapproval was of herself, or of Mr Beebe, or of the fashionable world at Windy Corner, or of the narrow world at Tunbridge Wells, she could not determine. She tried to locate it, but as usual she blundered. (R, p.14)

Lucy は Charlotte に象徴されるような閉鎖的な因襲的な考え方にとけ込めない。次の文も Charlotte がはめ込もうとする鋳型にどうしてもなじめなかった Lucy の心理的な飢餓状態をよくあらわしている。

> Conversation was tedious; she wanted something big, and she believed that it would have come to her on the wind-swept platform of an electric tram. (R, p.45)

常に現状にモヤモヤとした不満を感じている Lucy にとって Emerson 父子と知り合ったことは、自分の周囲のモヤが少しずつ薄れていくことであった。彼女に関する形容には new という語が多く使われている。たとえば次の文は一人で散歩に出かけた Lucy が Botticelli の Birth of Venus の写真を買うという、彼女にとっては大冒険をやった時の描写である。

> But though she spent nearly seven lire, the gates of liberty seemed still unopened. She was conscious of her discontent: it was new to her to be conscious of it. (R, p.46)

Lucy はイタリア滞在を通してこのような "new" な感覚を次々と体験していき、それらはやがて George との恋愛という形で結実するのであるが、その起点及び以後のガイド役を務めるのが Mr. Emerson なのである。

Ⅳ.

以上、A Room with a View の中で Mr. Emerson が前2作との関連に於て如何に重要な役割を担っている人物であるかをみてきたのであるが、同時に彼は次の作品 Howards End への手がかりを示す人物であるとも言える。Mr. Emerson は Lucy のガイドとなり彼女と George の結びつきを図る人物として描かれているが、この「聡明なルーシーの頭と、ジョージの自然的・本能的性質との結合」[19] こそ、Forster にとっては人間及び人間関係の理想の姿であった。そして Howards End では、まさにこの 'connection' が今度は主要なテーマとして標語にうたわれているからだ。Where Angels Fear to Tread にも Forster の 'connection' に対する意図はみられる。が、それは Mr.Emerson に象徴されたほど顕著なものではなかったし、また実際その結果も Lilia の死、彼女と Gino との間の赤ん坊の死、Gino と Philip たちとの交渉の決裂という形で示されているように失敗に終っている。

S・スペンダーが、Forster は人間関係についていくつかの夢をもっており、しかもそれは「ほとんど観念的な夢」であるが故に一層「人々の頼みとしうる夢」であると言っている[20]が、Mr. Emerson はまさに Forster ばかりでなく我々読者にとっても「頼みとしうる夢」の人である。

注

(1) Francis King, E.M.Forster and his world (Thames and Hudson, London, 1978), p.47.
(2) P.N. Furbank, E.M. Forster: A Life (Secker & Warburg, London, 1977), p.91.
(3)(4) King, op.cit., p.29.
(5) Ibid., p.30.
(6)(7) Furbank, op.cit., p.19.
(8) King, op.cit., p.28.
(9) Ibid., p.26.
(10) Ibid., p.43.

(11) Ibid., p.44.

(12) Furbank, op.cit., p.83.

(13) King, op.cit., pp.47-49.

(14) Furbank, op.cit., p.83.

(15) Ibid., p.87.

(16) J.S. Martin, E.M. Forster: The Endless Journey (Cambridge University Press, 1976), p.107.

(17) King, op.cit., p.5.

(18) ボーヴォワール著　生島遼一訳　『第二の性』（新潮文庫）参照

(19) 近藤いね子編　『20世紀英米文学案内・E. M. Forster』（研究社）p.91.

(20) S・スペンダー著　深瀬基寛・村上至孝訳　『創造的要素』（筑摩書房）pp.113-38.

付記：テキストは E.M. Forster: A Room with a View, Penguin Books, 1966, Where Angels Fear to Tread, 1966, The Longest Journey, 1967. を用いた。